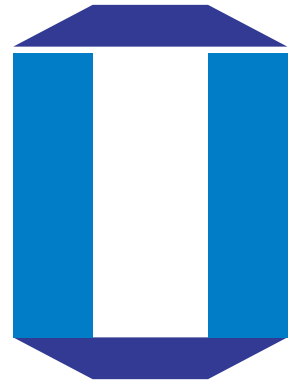


# 岡山大学

文明動態学研究所

OKAYAMA UNIVERSITY  
RESEARCH INSTITUTE FOR THE DYNAMICS OF CIVILIZATIONS



OKAYAMA  
UNIVERSITY

世界への扉を開く



2024年度 研究所案内

所長からのメッセージ



新型コロナウイルスのパンデミックはいまだ終息の兆しを見せず、私たちの生命、社会に大きな影響を与えています。この世界的な危機を乗り越えるために、感染予防やワクチン開発等についての理化学的な研究が進められていますが、社会関係や価値観、文化的慣習や経済など、人文社会科学的な側面も感染症の動向に深くかかわっていることが実感されつつあります。

人類の誕生からおよそ1万年前までの長い間、小規模な集団で分散して生活していた人類にとって、パンデミックは起こりませんでした。感染症が人類にとって大きな脅威となるのは、農耕や牧畜が始まり、人口が増え、都市や国が形成され、数万人から数十万人という規模での集住生活が始まってからのことです。農耕や牧畜による自然の人工化、技術の発達、新しい世界観や価値観の創造という人類特有の現象 (=文明)は、人類に繁栄をもたらしましたが、同時に戦争、環境破壊、差別、貧困などの多くの問題が生まれました。

現代社会が抱えるさまざまな課題は、長い歴史の中でヒト、社会、技術、環境が相互に密接に関連しあって発生してきたものです。今の状況だけ、個別の要因だけを見ているだけでは根本的な解決につながる長期的な展望を見出すことは難しいでしょう。文明動態学研究所は、人文社会科学における関連分野の連携および自然科学分野との連携による学際的研究体制を構築し、分野限定的研究では見えてこない人類史の実態を明らかにすることをめざします。

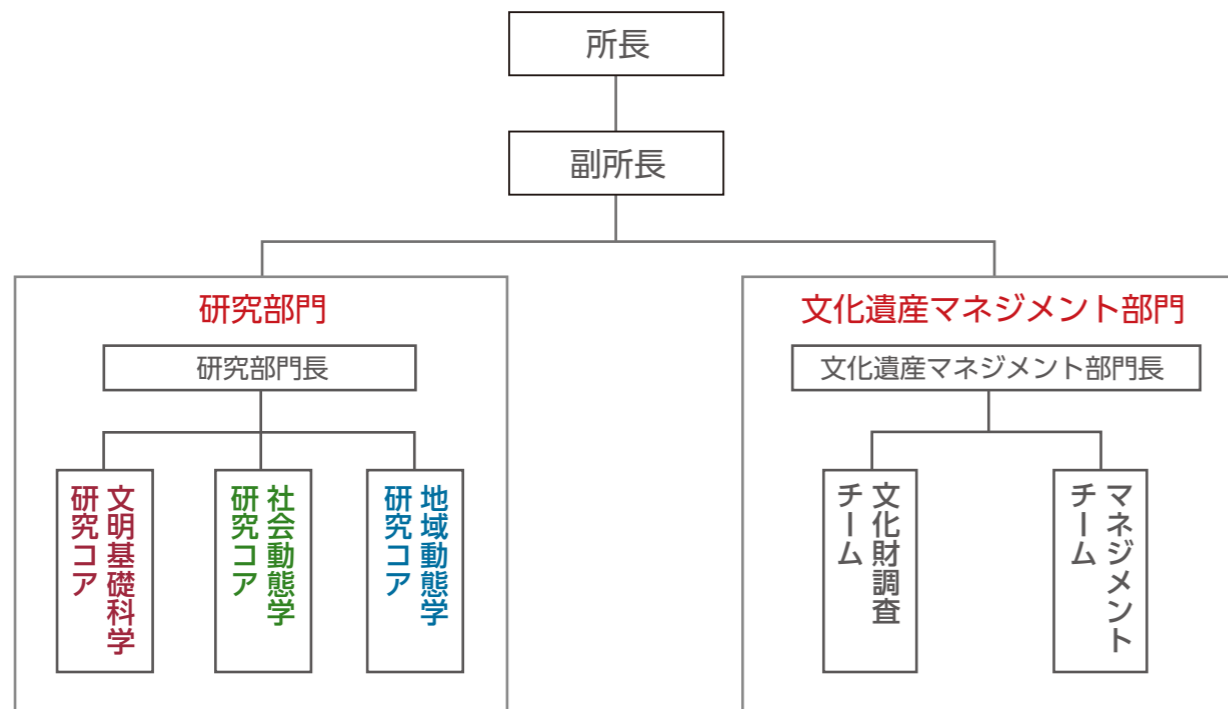
岡山大学 文明動態学研究所  
所長 松本直子

ミッション

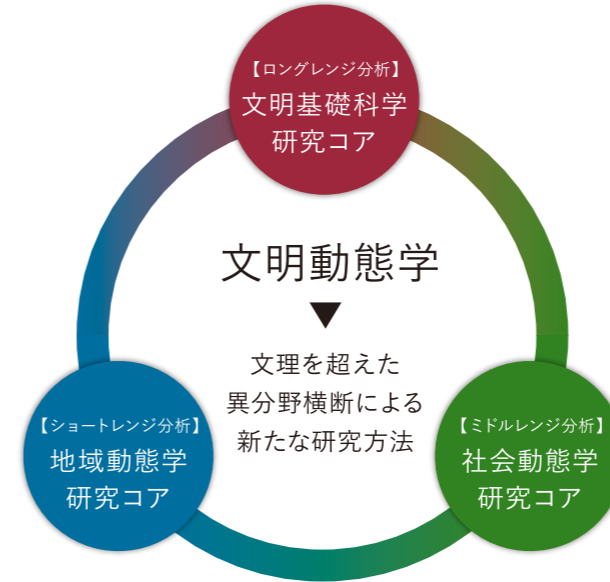
分野・地域・時代を結び  
人文・社会科学研究的な新しい未来へ

現代社会が抱える様々な問題を人類の文明の消長という大きな枠組みのなかでみつめ直し、過去の探求と地域への着目から得られた新たな知によって、持続可能な社会の構築に貢献する新学問、文明動態学を創造します。

組織図



研究部門



<b>【ロングレンジ分析】</b> 文明基礎科学研究コア 人類の誕生と文明の形成	国境を越えた人類史学としての考古学 人類と環境 地域形成の歴史的理解
<b>【ミドルレンジ分析】</b> 社会動態学研究コア 社会の複雑化と地域社会の形成	生存のシステムとしての家族・地域・国家 災害と地域社会のレジリエンス 社会変容とジェンダー
<b>【ショートレンジ分析】</b> 地域動態学研究コア 日本社会の縮図としての瀬戸内	地域社会の持続性と市場、制度 生活文化の連続・非連続 アートが拓く地域の未来

種々の研究プロジェクトを通じ、学内外の研究者等が有機的に関わり、国際的なネットワークを形成することで、人文科学、社会科学を中心とした文理横断型研究拠点を確立。

岡山大学学術研究院社会文化科学学域と密接に連携し、新たな知の創造と社会の還元にとりくむ人材や地域社会と国際社会で活躍できる人材を育成。

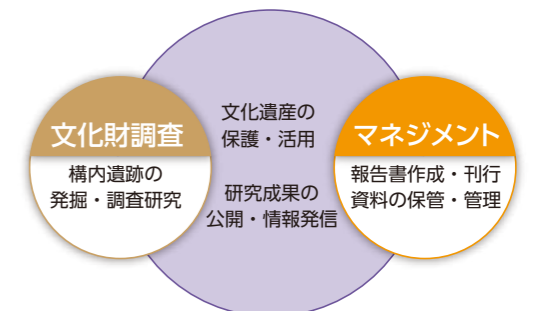
文化遺産マネジメント部門

■概要 要/岡山大学埋蔵文化財調査研究センターを前身とする本部門では、岡山大学の文化遺産の調査・保護・研究・活用を行い、なかでも本学敷地内埋蔵文化財について発掘調査・研究および出土資料等の管理を行います。調査・研究のみならず、その成果をひろく社会に情報発信し、活用していきます。

■沿革 岡山大学内における埋蔵文化財調査は、岡山市教育委員会が1978年に鹿田地区で行った立会調査に始まります。県や市による立会・試掘調査は1982年まで続けられました。本学における遺跡保護体制の整備は同年から本格化し、本学の円滑な施設整備の推進とともに本学の埋蔵文化財の保護を図るため、翌1983年に岡山大学埋蔵文化財調査室が設置され、1987年11月には埋蔵文化財調査研究センターに改組されました。同センターは業務として学内の埋蔵文化財調査研究にあたり、その成果を発掘調査報告書として刊行し、出土資料の管理を実施してきました。また定期的にキャンパス発掘成果展や特別展として、調査成果の展示公開を行ってきました。この度、文明動態学研究所との統合にあたり、これまで同様に埋蔵文化財に関する業務を継続するとともに、研究所の理念の通り、研究の一層の深化をめざします。

■組織構成/本部門は、文明動態学研究所教授会の具体的審議に沿って運営します。また、構内遺跡調査は全学的業務と位置付けられており、埋蔵文化財調査委員会の指導の下、調査・研究にあたります。本部門では、部門長(教授)、チームリーダー(准教授)、および4名の助教と技術補佐員5名が業務にあたっています。文化財調査チーム、マネジメントチームの2つのチームは主たる担当を分けていますが、連携して本学の文化遺産の保護・活用を図り、研究成果のさまざまな発信、公開に取り組みます。

文化遺産マネジメント部門の  
2つのチーム



## ロングレンジ分析

### 文明基礎科学研究コア

#### 人類の誕生と文明の形成

#### 国境を越えた人類史学としての考古学

#### 人類と環境

#### 地域形成の歴史的理解

- 鈴木真太郎【生物考古学・マヤ考古学】
- 飯塚義之【岩石学】
- 植村玄輝【哲学史・現代哲学】
- 木村理【日本考古学】
- 四角隆二【西アジア考古学】
- 杉山三郎【新大陸考古学・人類学】
- 杉山奈和【メソアメリカ考古学・動物考古学】
- 清家章【日本考古学】
- 千葉裕太【メソアメリカ考古学】
- 塚本憲一郎【メソアメリカ考古学】



テオティワカンでのドローン計測風景

- 松本直子【認知考古学・ジェンダー考古学】
- 山口雄治【日本考古学・西アジア考古学】
- ライアン ジョセフ【日本考古学・東アジア考古学】

本研究コアは、長期的なスケールで文明の誕生と動態を見据え、文明を生み出す人の特異性や文明の盛衰に関わる諸要因を明らかにすることをめざします。人類にとって大きなターニング・ポイントである農耕がどのように始まったのか、周期的な気候変動に対して、人類がどのように対応してきたかなど、これからどのように持続可能な社会を作っていくかを考える際の手がかりとなる、普遍性の高いテーマを追求します。

この目標を達成するため、分野横断的な研究を推進することが本研究コアの特徴です。X線CTやミュオンを使った非破壊分析や生物考古学的研究をはじめ、地球科学、化学、植物学、生物学、遺伝学、物理学などの学内および他

機関の研究者と連携した文理横断的な研究により、考古資料から社会や環境に関する情報を得るための新しい研究方法の開発や、シミュレーションや地理情報システム（GIS）を用いた分析やモデル化を進めます。

瀬戸内地域に加えて、メキシコやグアテマラなどメソアメリカ地域も本研究コアの重要なフィールドです。多様な環境で展開した文明動態の国際的な研究によって、地域がかたちづくられる歴史的な過程や、文明を生み出す人間の本源的な性質、文化や社会の多様性が生まれるメカニズムを解明し、人間とは何か、という人文学の究極的な問いに迫ります。

## ミドルレンジ分析

### 社会動態学研究コア

#### 社会の複雑化と地域社会の形成

#### 生存のシステムとしての家族・地域・国家

#### 災害と地域社会のレジリエンス

#### 社会変容とジェンダー



マダガスカル鉄道の近くで

- 今津勝紀【日本古代史】
- 岩崎志保【日本考古学・中国考古学】
- 大久保範子【日本美術史・浮世絵】
- 大澤誠【文化人類学】
- 川本直美【文化人類学】
- 沢山美果子【日本女性史】
- 柴田亮【中世考古学】
- 徳永誓子【日本中世史】
- 中谷文美【文化人類学・ジェンダー論】
- 野崎貴博【日本考古学】
- 東野将伸【日本近世史】
- 松村圭一郎【文化人類学】
- 光本順【考古学・博物館学】
- 室山京子【日本近世史】

地球上に拡散した人類は、それぞれの地に適応し、独自の文化を形成してきましたが、その過程で社会システムはより複雑化しました。現代の人類が直面し、解決を要する多くの問題が前景化する中で、その淵源をみつめ、さまざまな問題の形成・変容のプロセスを解明することは重要な意味を持つでしょう。

本研究コアでは、中期的なスケールの時間軸と異なる言語・文化への広がりを含む空間軸を組み合わせ、有史以来の人類の歴史と社会を対象に、家族・地域・国家および宗教、社会階層やジェンダー、集団間関係など、社会的なシステムや人間関係が環境変化や人口変動などと絡みあいながら変化する様態に光を当てます。

人と人、人と自然の関係性を再考しつつ、多様性のある

持続可能な社会をいかに実現していくかという課題を掲げ、従来の価値観に沿って引かれた境界線をさまざまに引き直しながら、過去から現在への軌跡を可視化し共有することの意義と必要性を具体的に示します。

進行中の研究プロジェクトは、地域歴史資料アーカイブの構築やICT技術による文化資源の社会化、考古学的基礎研究など多岐にわたりますが、いずれも学際的な視点を重視しつつ進められています。多彩な分野の研究者の協働による異分野融合の可能性を追求するほか、人類総体を視野に入れた人間の生存と生活に即した社会動態の解明を目的として、国際共同研究を進めます。

## ショートレンジ分析

### 地域動態学研究コア

#### 日本社会の縮図としての瀬戸内

#### 地域社会の持続性と市場、制度

#### 生活文化の連続・非連続

#### アートが拓く地域の未来



広島県尾道市の百島より 写真/才土真司

- 津守貴之【世界経済論、グローバル・ロジスティクス論】
- 岩淵泰【地方政治・市民参画・まちづくり】
- 北川博史【都市地理学・産業地理学】
- 佐藤淳平【東アジア経済史】
- 田代潤貴【行政法】
- 天王寺谷達将【会計学】
- 西田陽介【経営戦略（企業、非営利組織）】
- 福重さと子【行政法・公物法】
- 松岡弘之【日本近現代史】

地域動態学研究コアは、研究対象期間を広義の「現代」＝過去 200 年以内の時期としています。この時期は 1980 年代までは「国民」、「国民国家」の創出・形成が、それ以降はこれらがグローバル化の進展によって溶解・解体する、あるいはその反作用としてナショナリズムが「硬化」するという現象が見られます。とりわけ 1980 年代以降はグローバル化が急激に進展しています。グローバル化とはヒト、モノ、マネー、情報の空間的な移動性が大きく向上する現象であり、それは空間的に見るならば、インターローカル化＝国境を越えた都市・地域間ネットワークを形成させるものです。したがって、「現在」の特徴であるグローバル化を考察するには地域社会とインターローカル・ネットワークのあり方を分析

する必要があります。

インターローカル・ネットワークは市場を通じて形成され、市場はそれを支える制度によって機能します。制度は各地域独自の文化を土台として形成されてきました。一方でグローバル化は各地域がそれぞれに育んできた制度・文化・技術の変容・融合をもたらしてもいます。そしてこれらの変化や秩序の中で活動し、また秩序を形成・持続し、変化をもたらしているのは企業や個人、行政体等の各主体です。本研究コアでは移動性の変化による「国民」の創出・形成・溶解・解体・硬化のメカニズムとそこにおける地域社会の役割・あり方を市場、制度、文化、技術および主体等の諸側面から総合的・多面的に分析します。

## 古代マヤ文明の考古人骨研究

現在のメキシコ南東部から中央アメリカ諸国にかけて古代マヤ文明が栄えました。紀元前 1500 年頃にその萌芽が認められ、16 世紀初頭にスペインに征服されるまで、旧大陸の諸文明から干渉を受けることなく、独自の文化、歴史を築きました。以前は“世界史に残る謎”とも評され、“謎と神秘の古代文明”という側面が頻りにクローズアップされてきましたが、昨今では考古学を中心とした様々な研究が進み、『謎』は少しずつ科学的知見へと変貌を遂げています。

文明動態学研究所では、鈴木真太郎教授を中心に、古代マヤの、特に考古人骨の研究が進められています。発掘時の骨資料の詳細な配置状況から腐敗の過程、遺体の状況を復元するアーキオタナトロジー、死亡時年齢の推定や性別の判定だけではなく、故人の生活習慣などを追求する詳細な骨学鑑定、食性や出自の追跡を可能にする安定同位体の分析、さらには古 DNA の抽出 / 解析など、様々な分析を駆使し、古代文明をその双肩に担った古代一人一人ひとりの素顔に迫る文理融合的な学際研究です。

### 主な共同研究

- アリゾナ大学（米国）と共同で、マヤ文明最古級の巨大祭祀施設で知られるアグアダ・フェニックス遺跡（メキシコ）出土人骨の研究を行いました。特に腐敗過程の復元や、基礎骨学鑑定を担当しています。
- パリ第一大学（フランス）と共同で、カンクエン遺跡（グアテマラ）出土人骨の研究を進めています。主に安定同位体分析による移民動態の研究を担当しており、ユカタン自治大学（メキシコ）、ハーバード大学（米国）と共同で古 DNA の抽出と解析も行っています。
- イェール大学（米国）と共同で、モンタナ遺跡（グアテマラ）出土人骨の総合的な研究を開始しています。



大学院生と共にいったカンクエン遺跡出土人骨試料採取の様子



グアテマラ、デルバジェ大学の考古人類学研究センターと研究協力協定を結び、マヤ文明圏に研究拠点を構築 Foto: cortesia UVG

## 文化財レスキュープロジェクト

岡山史料ネット及び全国の史料ネット、国立歴史民俗博物館・東北大学・神戸大学を核として人間文化研究機構が推進する「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業」と連携し、2018 年の西日本豪雨で被災した資料の保全活動に取り組んでいます。

災害時に滅失することの多い地域歴史資料の保全と活用を通じて、地域文化を掘り起こし、新たな地域社会の創造に貢献したいと考えています。人々の生活とともにある未指定の文化財や地域の歴史遺産に関する地域歴史資料学、デジタル技術を利用した数値計算モデルの構築、理化学分析や保存科学など新たな人文学の方法をもとにして、洪水・地震・疫病・気象などの災害と人々の生活を地域に即してとらえ直す、新たな地域史研究の創出をめざしています。

また全国の「史料ネット」活動を展開する各大学と連携して、地域社会と住民意識・歴史意識の相互関係を理解し、多様で開かれたレジリエントな地域社会づくりに貢献できる人材を育成するための教育プログラムの開発にもつとめています。

1995 年の阪神淡路大震災を契機として、歴史研究者・文化財担当者・博物館関係者・市民が自主的に連携し、民間に伝わる未指定の文化財の救済と継承をめざす取り組み、「歴史資料ネットワーク」が生まれました。その後、列島各地で頻発する災害を目の当たりにして、同様の目的を掲げた団体が各地で生まれています。岡山史料ネットは、災害に見舞われる前から、予防的にネットワークを作ることを目的に、2005 年に日本最初の予防型ネットとして、岡山大学に事務局をおきスタートしました。文明動態学研究所も積極的にこの事業に取り組んでいます。



襖下張り文書のレスキュー



被災資料の安定化作業

## 瀬戸内プロジェクト

過去 約 30 年間、フラグメンテーション（生産工程の細分化 とその国境を越えた分散配置）がグローバルな情報システムとロジスティクス・システムの形成・融合によって急速に展開しています。それは産業集積パターンを大きく変化させ、新興都市・地域のこれまでにない急激な成長・肥大化を促す一方で、かつて中心な機能を集積させてきた都市・地域の衰退と中・低位の都市・地域の低迷をもたらしています。

このような状況を踏まえて、本プロジェクトでは低迷・衰退する中・低位都市・地域の集合体とも言える瀬戸内地域を対象として、そこにおける機能低集積化・分散化加速のメカニズム・構図を市場と法制度、文化およびそこで活動する各主体といった要因から多面的に分析するとともに、その空間的・歴史的特徴を諸外国・諸地域（台湾や中国、韓国、オーストラリア、フランス、ヴェトナム等）との比較を通して考察します。そして機能低集積地域が持続性をもち得る条件・要因を当該地域の潜在的コア・コンピタンスの顕在化とそれを基盤とした新たなインターローカル・ネットワークの構築の可能性を検証することで検討します。

プロジェクトには地域動態学研究コアのメンバーとともに、2021 年度より台湾淡江大学・日本政経研究所の蔡錫勲氏（専門分野 経営戦略論）、胡慶山氏（同 比較憲法）、小山直則氏（同 国際経済学、貿易政策）、徐泓馨氏（同 日本政治、日本外交）も加わりました。また 2022 年からは岡山大学農学系の駄田井久氏が加わり、2023 年 1 月、農業という定着型産業の維持・活性化による機能低集積地域の持続性を検討するシンポジウムを開催しました。このシンポジウムは完全オンライン形式で、日台間を繋ぐとともに、産官学関係者に広く公開し、活発な議論が行われました。大学内での研究と社会課題の相互交流・相互活用をさらに推進していきます。



シンガポール：PSA 本社から見たパシルバンジャン・コンテナ・ターミナル



ドバイ：下町から超高層ビルを眺める

## 岡山大学構内遺跡

岡山大学には津島キャンパスに津島岡大遺跡、鹿田キャンパスに鹿田遺跡、三朝キャンパスに福呂遺跡が存在しています。

2023 年度までに津島岡大遺跡では 43 次、鹿田遺跡で 29 次、福呂遺跡で 2 次と、合計 74 次にわたって発掘調査を実施してきました。その成果は津島岡大遺跡関係で 22 冊、鹿田遺跡関係で 17 冊、福呂遺跡で 1 冊の報告書にまとめて刊行しています。

### 津島岡大遺跡

西日本では有数の縄文時代の集落と、弥生時代以降近世に至るまでの水田開発の歴史解明に意義を持つ遺跡です。さらに 1907 年に日本陸軍駐屯地として整備・利用されたことから、戦争遺跡としての性格も有しています。



陸軍橋梁施設調査の現地説明会

### 鹿田遺跡

弥生時代中期以降の集落の変遷、とりわけ古代・中世の集落構造を知るうえで重要な遺跡です。藤原摂関家殿下渡領「鹿田庄」との関連が深くうかがえる遺構・遺物が出土することでも知られています。



発掘成果展「中世の吊いー鹿田遺跡の事例からー」

津島岡大遺跡・鹿田遺跡は岡山平野の南北に位置し、両遺跡の調査研究が継続して実施されています。市街地にありながら、遺跡範囲の大半の調査が継続される例は大変貴重です。これにより該地の原始・古代を中心とする歴史と文化の多様性を明らかにしつつあります。また、ボーリング調査による地形環境の分析や、出土種子や木材等の分析、年代測定等、自然科学系の多分野と連携した文理横断的共同研究を推進しています。

### 福呂遺跡

1997 年に固体地球研究センター（現惑星物質研究所）施設建設に伴い新規に発見されました。約 8000 年前の縄文時代早期末から中世の遺構・遺物が見つかり、それまで空白であった三朝地区の歴史が明らかになりました。

# 2023年度 RIDC活動実績

## <シンポジウム・講演会>

- 6月 第30回知好楽セミナー「カラー写真でみる1952年の岡山の街・人びと」J.ホールのいたミシガン大学日本研究所岡山分室の遺産」
- 6・7月 「出ユーラシアの統合的人類史学」第9回拡大全体会議—出ユーラシアにおける王権の創成：超越的出現のメカニズム—文部科学省科学研究費助成事業新学術領域研究(研究領域提案型)「出ユーラシアの統合的人類史学：文明創出メカニズムの解明」ほか
- 10月 カカオとアンデス文明のゆりかご—エクアドル考古学の最前線—  
文部科学省科学研究費助成事業新学術領域研究(研究領域提案型)「出ユーラシアの統合的人類史学：文明創出メカニズムの解明」ほか
- 12月 第31回知好楽セミナー「はじめての人のための「愛生」ヲ読ム会」
- 1月 オンライントークセッション 「考古学×歴史学で古代吉備にせまる」

## <公開講座>

- 10月 第22回 岡山大学キャンパス発掘成果展中世の弔い—鹿田遺跡の事例から—記念講演  
狭川真一 大阪大谷大学 教授  
柴田亮 文明動態学研究所 助教
- 11月 公開講座第4回「DNAが語る先史・古代」  
藤尾慎一郎 国立歴史民俗博物館 教授  
清家章 社会文化科学学域 教授
- 2月 公開講座第5回「陶磁器が語る中世瀬戸内海」  
柴田圭子 愛媛県埋蔵文化財センター 調査課長  
柴田亮 文明動態学研究所 助教
- 3月 公開講座第6回「備前地域における飛鳥時代の須恵器」  
馬場昌一 寒風陶芸会館 館長  
木村理 文明動態学研究所 助教

## <展示>

- 10月 11-18日 第 22回 岡山大学キャンパス発掘成果展中世の弔い-鹿田遺跡の事例から -  
岡山大学鹿田キャンパス

## <RIDCマンスリー研究セミナー> オンライン開催

- 4月 「地域社会の持続可能性と企業のCSR—美術館運営を事例に—」  
西田陽介 社会文化科学学域 教授
- 5月 「文明動態学的國吉康雄論—少女に「命のために走れ」と言った画家についての新考察—」  
才士真司  
岡山大学教育学域 国吉康雄記念美術教育研究と地域創生寄付講座 准教授  
同 5Dラボ ディレクター
- 6月 「幼子イエスをみる?さわる?」  
川本直美 文明動態学研究所 客員研究員
- 7月 「和歌山県磯間岩陰遺跡古墳人骨のDNA分析」  
清家章 社会文化科学学域 教授
- 9月 「力士と手形—記録と魔除けの視点から—」  
大久保範子 社会文化科学学域 准教授
- 10月 「旧日本陸軍第十七師団駐屯地造営時の古写真を読む」  
野崎貴博 文明動態学研究所 助教
- 11月 「技能実習生が誕生するとキーインドネシアのある送り出し式典を中心に—」  
山口裕子 北九州市立大学文学部 教授  
文明動態学研究所 客員研究員
- 12月 「『鳥獣人物戯画』の験競(げんくらべ)」  
徳永誓子 社会文化科学学域 准教授
- 1月 「持続可能な開発教育とは—国際法の歴史から—」  
川上陽子 藤井高等学校 常勤講師  
フランス・トゥールーズ第1大学大学院 法学博士
- 2月 「生殖と男性の諸問題—『射精責任』(ガブリエル・ブレア著、2023年、太田出版)を中心に—」  
齋藤圭介 社会文化科学学域 准教授
- 3月 「非農家出身者が非農家出身者になるまでのエスノグラフィ—その生成過程における多層性、多重性、多様性—」  
大澤誠 文明動態学研究所 客員研究員

## <刊行物・映像作品>

- 学術雑誌「文明動態学」Vol.3  
映像作品「考古学×歴史学で古代吉備にせまる」  
オンライントークセッション  
映像作品「新しい産業としての農業の確立に向けて」  
※映像作品はいずれも岡山大学の映像制作・配信スタジオ「5D Lab.」と協同制作

